

「雅楽」をご存知でしょうか？日本の伝統的な音楽であるにもかかわらず、なかなか接する機会が少ないのではないかと思います。北九州で雅楽をもっと知ってもらいたいと、北九州雅楽振興後援会をたちあげ、今年で演奏会も5回目を迎えることができました。演奏は地元で活動する天理関門雅楽会の皆さん、舞楽の舞に関西でご活躍の女人舞楽 原笙会さんに今年お願いしております。雅楽はもともと外来音楽を指していましたが、現在では日本古来の音楽や舞、平安時代に新しく作られた歌曲等を含めた総称を「雅楽」と呼んでおります。千二百年余りの伝統を持つ雅楽は、現存する合奏音楽の中で世界最古の歴史をもつと言われております。どうぞ今日の演奏会から、もっと雅楽に興味を持って頂ければ、もっと言うなら私たちと一緒に演奏したり舞ってみませんか？お待ちしております…。

## 演目紹介

### 胡蝶（こちょう）

源氏物語の巻の名にもなっているこの舞は、迦陵頻と対比して「蝶は、ましてはかなきさまに飛び立ちて山吹の籬のもとに、咲きこぼれたる花の陰に舞い入る。」と描写されています。この曲は、延喜6年（906年）勅令に依り、山城守藤原忠房が作曲、舞は敦実親王の御作。銀色の天冠に山吹の造花を挿し、蝶の作り羽根を背負い、手に山吹の花を持って舞います。女人舞楽では、胡蝶に始まり胡蝶に到ると捉えて励む、右方舞基本形が凝縮した、優雅で可愛い舞です。

### 柳花苑（りゅうかえん）

「頭の中將、いづら。遅し」とあれば、柳花苑といふ舞を、これは今すこし過ぐして、かかることもやと心づかひやしけむ、いとおもしろければ、御衣たまわりて、いとめづらしきことに人思へり。「柳花苑」という舞の名は、源氏物語（花宴）の巻の、この場面ただ一箇所出てくるだけで、他の時代の物語、和歌などにこの舞のことは見えません。それもそのはずで、女舞であったこの舞は、千年ほど昔に絶え、曲だけが現存していたのです。昭和63年秋、源氏物語にみる舞楽を数曲選び、公演を準備中、「名も美しい柳花苑とは？」という質問を受けた原笙子は、舞楽生活50年の記念に、復活を思い立ちました。平成元年4月8日、「信西古楽図」に遺された唐風装束の舞姿を参考に、髪結い上げ、男性に伍して仕事をし、歌詠む教養を具えた宮女たちが、比礼打ち振り歌垣作って遊ぶ姿を再現してみました。

### 蘭陵王（らんりょうおう）

単に「陵王」とも呼ばれ、舞楽の中でも最もよく知られている代表的な曲で、「納曾利（なそり）」と番舞（つがいまい）になっています。一説に中国の南北朝時代、南陵王長恭という智勇共にすぐれた武将が容姿が女性のように美しく優しかったので、出陣の際は士気を鼓舞するため、金色の恐ろしい面をつけ、大勝を博したのでその武勇をたたえて作られたといわれています。装束は、竜の唐織りの裯襦（りょうとう）装束、雲形地紋の緋の袍をつけます。舞人は金色龍頭の面（童舞の場合は天冠）をつけ、手に金色の桴をもちます。



会場 足立山妙見宮神楽殿  
北九州市小倉北区妙見町17-2  
☎093-921-2292 ✉ info@myouken.or.jp

アクセス

■JR小倉駅下車、  
西鉄バス27・28・93・8 黒原・霧ヶ丘方面バス乗車  
黒原一丁目下車 徒歩約10分

■北九州都市高速 足立ランプ出口より 約10分

■九州自動車道 小倉東ICより 約10分

